

うたらは。

短歌×写真のフリーバー「うたらは」
2025.07 vol.39

TAKE FREE

色彩
今回のテーマ

短歌とは

5・7・5・7・7の5句31音のリズムで詠まれる短い抒情詩。
俳句で使われる「季語」は不要。

古くは奈良時代から身分の貴賤を問わず親しまれ、
現代でも日々の想いを綴る詩形として幅広い層に詠まれています。

一方で、その長い歴史を国語の授業で習うこともあり、
短歌とは難しいものである、と思っている人もしばしば。
このフリーペーパーは「短歌をよく知らない人」に
現代短歌の面白さに触れていただくために作ったもの。
軽い気持ちで、ぜひページをめくってみてください。

作品テーマ

色彩



ときに華やかに
ときに大人しく
個性の数だけ
色があるんだ

わたしたちきつと補色だ

どこまでも通じ合うのに遠すぎるから

いちばん遠くから
お互いを輝かせる
そんな関係も
悪くはないよね

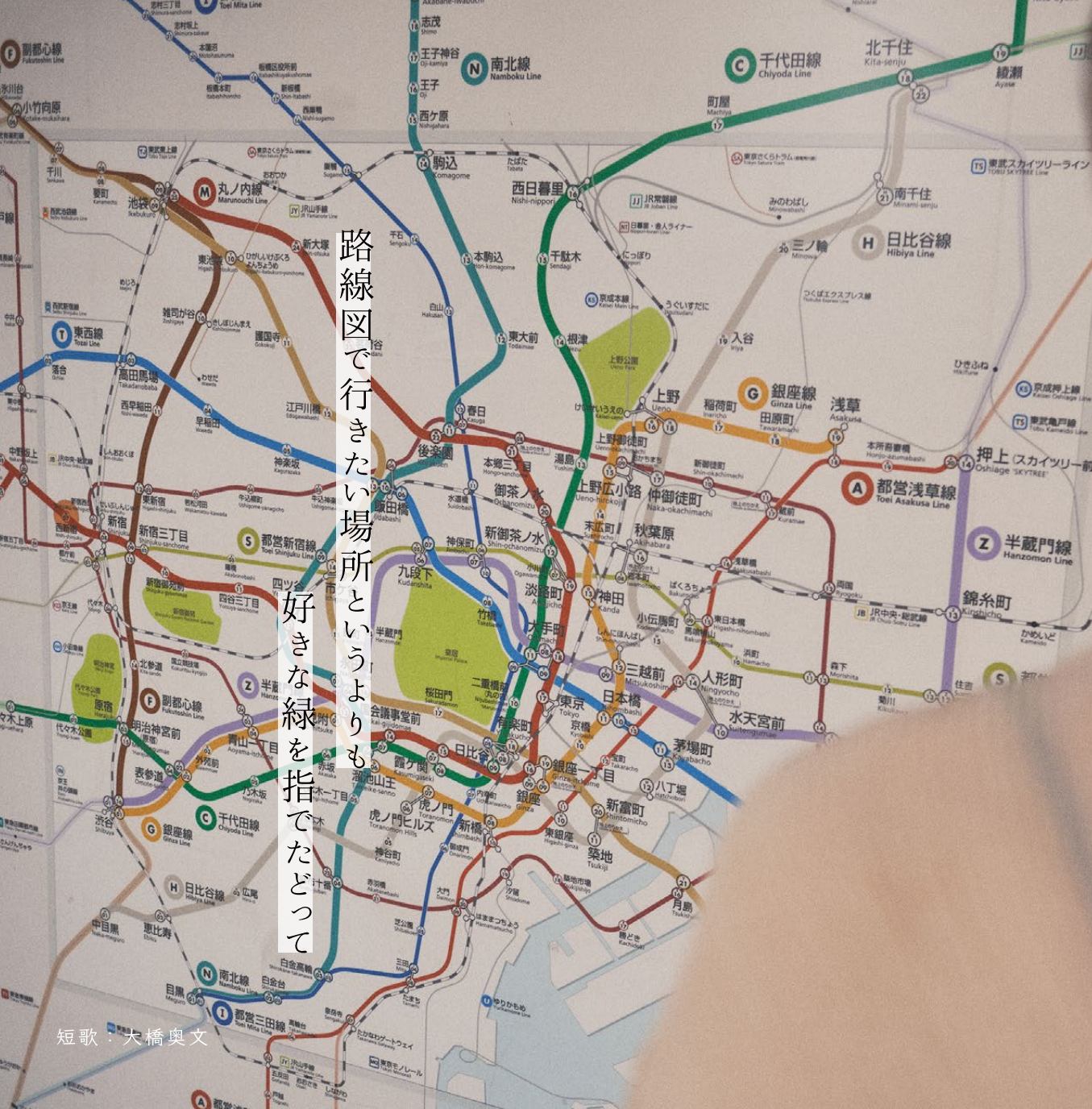
短歌：丸瀬まる

駆けだしてくる
子供たちまで
たぶん野原に
見たんだろう

青、緑、白は野原の色らしく

ファミリーマートに迷い込む蝶

短歌：友常甘酢



路線図で行きたい場所というよりも

好きな緑を指でたどって

どこでもいいから
どこに行きたい
そんな週末に
彩りを添えたくて

新緑を背景にして駆けてくる

サラブレッドのようなまなざし

太陽が似合う
人だったから
その真っ直ぐさに
憧れもした



子の作る積み木の街はカラフルで

わたしの街よりいつもまぶしい

ビルも車も
地下鉄も
こんな街なら
楽しいだろうね

赤ペンで自己採点した○×の数は自分の価値なんかじゃない／山宮のこ

オレンジの皮を剥いたらオレンジの果肉あるって正直だよ／立田溪

わたしじゃない、あなたが光りだしたから世界が反射してるだけだよ／井倉りつ

筆洗の濁った水は捨てられて海と交わり青色となる／貴田雄介

やがて咲く色とりどりの花々のことをおもって降る木の芽雨／静句かも

放課後と君が云うとき立ちのぼる青い矢車菊の面影／桐野黎

ゆめかわな髪色に染めたいらしいなんてか似合いそうだと思ふ／小緑悠

アルデンテ色の夕陽をあびながらふたり勇気について話そう／西鎮

青ならば進めで赤と黄は止まれ月は告れで合つてると思ふ／渡邊泰明

虹色はひかりの破片 うつくしい離ればなれでありますように／栗田悠太郎

幼子の絵の色使いに突飛さを求める大人を見透かす幼子／苔土演技

理由など要らないやうに走りゆく犬の世界に色のないこと／朧

野菜ジュースの誇張したオレンジが母にごくごく飲みこまれてく／バイン井

木犀のかおりにかるく酔いながらきみは金より銀を好んだ／玖嶋さくら

海へゆくバスの座席で傾けるラムネの瓶がすでに海色／十条坂

放課後にずっと話したもし三色団子に色を足すなら何か／外村ぼこ

弁当に黄色いピックあとバラン 緑黄色はばっちりである／榊枯井戸

きみどりが一気に短くなってゆく色鉛筆にも春が来ている／ともえ夕夏

鳩たちは紫外線まで見えていてもとどつかない虹を見ている／鴨岡佑

白だって二百色ある虹なんかほんとは五万色じゃないのか／畑 依裕

たぶんずっと勝てない人がいる春の

ジンジャーエールの泡のきんいろ

握めそうで
握めない
泡は弾けて
また逃げられる

短歌：芍薬

六色もあつたら樂に描けそうな

都会の春にわたしはひとり

わたしの街に
色がないから
日々がどうにも
つまらないんだ

見て、見て、と
満面の笑みで
誇らしげに咲く
青だったこと

おさなごのぬりえの少しはみ出すごと

フェンスを越える紫陽花の青



命を犠牲にして
生まれた色に
何を思えば
いいのだろうか

鮭たちの断面の色はなやかな

サーモンピンクという語の無慈悲

手花火が色とりどりの火に燃えて

恋は楽しいばかりじゃないね

恋をしてたら
毎日は
バラ色だなんて
誰が言ったか

黒いワンピースが鎧めく夜の
東京の地を打つ涙雨

眩しすぎる
街の明かりを
黒にまぎれて
乗り越えねばな



色彩②

虹色の油膜が水路を覆って必要悪とはほのかに綺麗／神洲橋

竿竹を売る声がしてこの街の夕日はきつとオレンジ色だ／麻数

踏みしめて泥や草木の混じり合う雪が純白と記憶される／田村ひなり

添えてあるトマト食べたなら添えてあるレタスの色の活気なくなる／猪山鉾一

窓際で「虹が出た」って聞いたから外を見たのにガチャのことかよ／吉田冬扇

赤黄青だけで全てを表せる人生なんてきつとないから／仲川曉実

青空が濃い日に祈るどの空も鳥が自由に行き交いますよう／杜野詩季

これも愛の真似事でしかないけれど桜でんぶをご飯に乗せる／みえるて

青かった芝も枯れ果て 大人とは虹彩が日々褪せていくこと／朽昏 窓

西風にゆれる水辺の彼岸花いつか死ぬものばかりまばゆい／関根裕治

水に色なんてないから何色も塗らない僕をゆるしたせんせい／奥 かすみ

真夜の町はほぼほ水底でローソンの青だけがうるさい／南万里

色が目に痛い五月の街路樹をなんでこんなに死にたいんだろう／君村類

いちめんの桜、菜の花、チューリップ春の色相環ぶちまけて／牧角うら

上着よりズボンのほうが明るいと妙に不安で外に出れない／あぐら

春の声のあふれやすさよ色彩に花かんむりを授けつづけて／石村まい

三月になったら白い靴をはくわたしに萌す蕾のような／紡ちさと

行儀よく並んだ十二の色たちを削って記憶になる吾子の夏／古澤茅世加

風呂上がりの裸足の君の爪先の赤を見つめて話を聞いた／冬美

ささやかなぼくを彩るために咲く花よあれよとさまよう春よ／夜明けの象

ときどきは死にたくなるかと
年一度問診票に心配される

(須磨堂)

おそらくですが健康診断の問診票でここまでストリートに質問されるようなことはないように思います。が、心の健康状態を確かめる系の設問はおおよそこれに近いものばかり。ここで「はい」と答えるようならもうだいたいババい状態です。年に一度の健康診断を死にたさチェックの場と捉えた視点がユニークで面白い作品です。

そうやって残されがちなパ
セリには賑やかな花言葉が
あつてね

(小緑 悠)

この作品を見るまでパセリに花言葉があるなんて考えたこともありませんでした。まずそこに驚きがあり、気になって調べてみると「祝祭」、「勝利」、「愉快な気持ち」、「お祭り気分」だとか、二重の驚きをいただく結果に。読者に調べるという行動を促した時点で作品として成功していますよね。発見のある作品は強い、の典型だと感じました。

気まぐれなシェフが心を入
れかえてマニユアルどおり
作ったサラダ

(たろりすむ)

「シェフの気まぐれサラダ」という慣用句を下敷きにした上で、SNSでもたまにバズる面白い対義語のエッセンスを加えて、誰にとってもクスツと笑える表現に仕上げたところに作者のセンスが溢れています。マニユアルに従う、ということが遊び心とは真逆にあるのだとも気付かされる一首ですね。



繰り返し洗った白衣はくたく
たで叶った夢は生活になる

(村川 愉季)

下の句の表現がすごく素敵ですね。作中で「夢」の象徴として置かれた「白衣」。医者なのか研究者なのかは分かりませんが、小さい頃からの夢を見事に叶えた後、夢の世界での生活がずっとキラキラするとは限らない。それでも「夢」が「生活」に変わることをむしろ喜びを捉えているような前向きな読後感に非常に好感を持った作品でした。

読む。

「月刊うたらば」より
文・田中ましろ



平気だと説明しても伝わら
ず犬の作法で心配される

(吉村のぞみ)

飼い犬との心温まる出来事が切り取られた作品。下の句の「犬の作法で心配される」は具体的な動きは描かれていませぬが主体の周りをウロウロするなど不安が行動に現れている様子が目に浮かびます。言葉は通じなくてもしっかりと絆があることを感じられるほのぼのとした景の描写が素敵です。

蟹の身を全部はぐして父な
りの間合いで心配してくれ
たこと

(深川 泳)

子供との距離感をうまく掴めなくなつた不器用な父親。それでも親子の間には目に見えない強い絆があることを感じさせてくれる作品。「蟹の身を全部はぐして」からはその空間に発話がなかったことが連想されますが、言葉少なに蟹の身をほぐす父の姿を「父なりの間合い」と受け取り、心配してくれていることも子どもにはきちんと伝わっている。そういう家族っていいなあ、と素直に思いました。

心にもないことばかり言っ
た日の空芯菜のしづかな苦さ

(麗)

主体の心情を景色の描写に重ね合わせるの短歌の作り方の基本のひとつ。茎の中心に穴の空いた空芯菜と、心にもないことばかり言った主体。食べればほろ苦く、その苦味がすなわち主体の感情でもあるのだと分かります。基本に忠実、かつ完成度高く詠まれたお手本のような一首です。

心太一口食べると7才の息
子が始めるトウルトウルの舞

(音子)

結句の「トウルトウルの舞」が最高です。息子さんにとってはつい踊り出すぐらい美味しかったのでしょうか。「7才」と年齢を具体的にしているのも効いていますね。心太のプルプル感を体全身で表現するような踊りは10歳だとそもそも踊らなさそうですし、3歳だとまだ上手く踊れなさそう。親子の微笑ましい景が眼に浮かぶ、まさに秀歌。



世の中にたえて桜のなかりせ
ば洗車がだいぶ楽になるのに

(畑 依裕)

在原業平の名歌「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」の本歌取りでしよう。情緒豊かに詠み上げられた元歌に対して、こちらはかなり現実的。一切の情緒をシャットダウンした表現ですが妙な納得感もあります。地に足の着いた生活をしている身としてはやはり人間くさい本音の方が共感を得られるのかもしれないね。

押し花をラミネートする
そのあいだずっと花と目が
あつていました

(鴨岡 佑)

押し花をラミネートする、ということには花にとっては水分を奪われながら押しつぶされたあと、さらに高温に晒されながら透明フィルムに閉じ込められるということ。悲鳴を上げることすらできない花から恨めしい目で見つと見られるような恐怖を感じました。当然ながら花に目はありませんが、あえて「目があう」と表現しているところも素敵です。怖い作品は良い作品。

短歌募集中

「月刊うたらば」では、いつでも作品を募集しています。毎月変わる投稿テーマにて、短歌作品をぜひお寄せください。今月のテーマは「うたらば」公式サイトをチェック↓





雨の名の数だけ色のある国に

生きて愛しくなる青しぐれ

新緑に降る
雨の明るさに
なぜたか少し
救われたんだ

短歌：田中ましろ



THANK YOU!

編集後記

今号も最後までご覧いただきありがとうございました！前回の編集後記で「作品投稿締切日から3ヶ月程度で新刊発行する」と豪語したのですが、なんとか3ヶ月で新刊発行ができました…！笑

今号はテーマが「色彩」なのに撮影時期が梅雨に重なるという私の計画性のなさが露呈する進行でしたが、モデルさんの晴れ女っぷりに救われる形で降雨での撮影は回避できました。ほんとにいつもありがとうございます。

テーマがテーマだけに短歌作品も色とりどりでしたが、意外と白や黒をテーマにする作品も多かったのが印象的でした。白や黒も彩りのひとつ。みんな違ってみんないい、な印象の今号をお楽しみいただけましたなら幸いです♪
また次号でお会いいたしましょう！

企画・写真・詩・デザイン
田中ましろ

うたらば vol.39【色彩】 2025年7月19日発行

○企画・撮影・編集 / 田中ましろ ✕@tnkmsr_photo

○モデル / TOKO @iamtookoo

○短歌 / 投稿者の皆様

✕ @utalover 地球儀 <https://www.utalover.com/>



短歌は
もっと
自由になれる